

② 「バイオリジカル (生物学的)」

レストランのメニューに「バイオリジカル ビーフ」というのがあり、何だが科学的で仰々しいと思いましたが、自然環境で放牧・育成されたという家畜福祉の意味で、日本でいうオーガニックに近いものでした。

今年のオランダで話題となっているのは、球根生産者の圃場周辺に移住してきた住民団体が農薬散布の停止を求めた訴訟で、生産者がその圃場で球根生産ができなくなるような判決が出たことです。球根養成には野菜などと同じ農薬が使われていますが、百合の場合ミネラルオイル (野菜でも使用) が農薬とカウントされ、大量の農薬が使用されていると風評被害の一面もあります。

ニュージーランドで前政権時に予定されていた「(温室効果ガスを排出する) 家畜へのゲップ課税」が、新政権 (別の党) で中止になるなど、脱炭素・温暖化対策の規制の在り方は各国で転換期に入っています。

訪問時、オランダで EU 議会選挙がありました。EU 全体の結果として厳しい環境規制反対や移民抑制への支持が見られると報道されています。

一方で、サステナブル (持続可能) な農業や園芸に資する技術は今後も重要で、Laser Weeder という雑草だけをレーザーで焼く機械が球根圃場でも導入されました。その識別情報を利用した正確な芽数や生育確認なども将来期待されます。百合の品種開発では、土地環境に左右されず発根や肥大が強い OT 系が増え、霜に強い品種など球根養成に関わる特性が、育種会社の品種選抜やライセンス販売でも重視されており、未来にはボトやバイラス耐性のある品種がバイオリジカルリリー (?) と呼ばれる時代がくるかもしれませんね。

③ 気候変動と遅霜

昨今、オランダの気象は温暖化と共に多雨の傾向が強く、23 年産収穫時 (昨年 10 月) 以降、現在まで雨が断続的に続いています。昨年同様、球根定植作業は遅れ、LA の多くは 4 月中に定植されましたが、オリエント OT は一部 5 月、リンペン養成においては一部 6 月まで定植が続いていました。訪問時は肌寒く、最高気温は 17~18℃、最低は 10℃を下回り、平年の 5 月前半くらいの気候でした。雨が続いたので生産者は灌水いらずですが、ボトには注意が必要です。

4 月は気温が比較的高く推移していましたが、4 月 23 日に△5℃級の霜が発生しました。販売球の多い、東・南オランダの生産者の多くは、例年通り霜対策をしましたが、海に近く通常は霜が降りにくい北オランダの圃場は対策が取れませんでした。訪問先への移動中に車中から見えた圃場のほとんどは緑で健全に見えましたが、写真のように上部が茶

